

という条件は、今日なおインドのおかれた文化状況をも示唆しているだろう。本来その内容をこそ批評したかったのに、はや紙面は尽きかけている。グーハタクルタの周回な著作は、カルカッタで二十世紀初頭に勃発したスワデシ国民運動が、それ自体ヴィクトリア朝美学の内的な不充足感を反映したものであった、と指摘し、岡倉天心インド滞在中の英文著作『東洋の思想』(1904)をその文脈に位置づける。これに勢いを得たのが、タゴール一族を中心とするベンガル派だが、その民衆芸術志向・国民主義的傾向に対抗したSahitya誌で、西洋のミーメシスの美学の普遍性を説いた作家のUpendrakishore Raychaudhuriとその息子Sukumar(は、映画作家として西洋から高い評価を得た、かのSatyajit Rayの祖父と父である。この一事からも、職人と芸術家をめぐる近代的社会階層意識の、インド社会に投げかけた錯綜が浮かびあがる。

一方ミッターの著作も、大英帝国の植民地芸術教育が、家元的職人養成の伝統に、西洋流の紳士たる芸術家像を持ち込み、社会的混乱をもたらした様を活写する。西欧絵画の自然主義的描写技法をラーマヤナやマーハバータの挿絵に導入して「西洋技法とインド的主題とのほどよいブレンド」(カーゾン総督)を成し遂げたRaja Ravi Varma (1848-1906)。その彼の収めた民衆的成功が、没後直後にとりわけベンガル出身の国民会議派から、あまりに甘美で露骨な肉体描写ゆえに拒絶された。そこは、国民主義が必要とした精神主義的なインドの自画像が、あやまたず反映しつつ具現されている。その思想的中心を担った、アイルランド出身の女性、ニヴェディータは、ほかならぬ天心の『東洋の理想』に序文を寄せた人物だった。そして同じ潮流に卒さず Abanindranatha Tagore (1871-1951)の弟子、Abdur Rahman Chughtai (1897?-1975)は、横山大観や菱田春草経由の「朦朧体」に、ムガールの伝統に連なる、正統的なイスラム教徒の知覚世界を見いだすこととなる。インド近代美術は日本との相関のなかに、はじめてその姿を見せるといってよい。そしてそれは、日本側の事情も変わらない。惜しいことにミッターの著作には、天心の日本美術院に関して、初歩的な事実の誤謬もなお多く見いだされる。だが、それは国際的発言に無関心だった日本側の責任というべきだろう。三月にはロサンゼルスでUCLAで韓半島の美術の近代を問う学会も開催される。近代アジアの歴史検証のための、学問の国際交流は、まだその端緒に付いたばかり、といっ

「日本」に閉塞した国民国家論市場を越えるために

〔東洋美術〕における西方志向 Occidental Orientation 国際比較にむけて

国際日本文化研究センター研究員、総合研究大学院大学助教授 稲賀繁美

二十一世紀とやらの始まりにあたって、いささか挑発的な言葉をお許し戴きたい。そもそも、なぜ日本の書評新聞では、外国語原典の紹介がほとんどなされないのか。出版社と訳者の都合から、極めて恣意的な選択のもとでなされた邦語翻訳にのみ照明があたるのも、異常といつてよい。逆に、日本で(学術的)出版物が、外国での書評の対象となることも、ほぼ皆無だが、それを怪しむ人すらいない。その傍らで、もっぱら欧米語の最新文献紹介に血道をあげる風潮は、洋書輸入代理店の利害に直結した学問市場を反映する。洋書カタログの繁盛ぶりには、欧米文学・語学研究者ばかりが異常繁殖した、極東の入超国の、世紀末的状况が投影・増幅されている。いったん日本列島の外から鳥瞰すれば、醜悪なまでに閉塞したこの痴的風景が、新世紀の幕開けにも、旧態依然として、なんの疑問も挟まれぬまま、演じ続けられている。

そうした、島国の閉じられた文化市場を解放するための切っ掛けは、無数にある。例えばインド。なぜこれだけの数の英文学者がいる国で、インド近代文学研究者が、これほどまで少数で周辺に止まっているのだろうか。日本国の学会で、インド哲学史といえば、リグ・ヴェーダ、あるいはサンスクリットやパーリ語の伝典研究、インド美術史といえば、もっぱら古代仏教美術の研究を意味するようだ。だが、そもそも、いつからそうした学問の伝統ができたのか。また、なぜインド近代研究者に、哲学や美術史の研究者はこれほどまでに少ないのか。さらにいえば、「第三世界」の研究者は、主に社会学、経済学、人類学、宗教学専攻で、伝統ある哲・史・文という学問分野／学者市場からは、いまだに疎外されたに等しい扱いではあるまいか。そうした条件のなか、インドの近代美術は(そして「第三世界」の近代美術一般は)、日本の美術学会で、これまでほとんどもに取り上げられることがなかった。ここには重大な欠落がある。それを補うため、書評新聞の本来の職務に忠実に、二冊の本を紹介したい。

Tapati Guha-Thakurta, *The Making of a New 'Indian Art': Art, Aesthetics and Nationalism*, 1992. Partha Mitter, *Art and Nationalism in Colonial India 1850-1922, Occidental Orientations*, 1994. ともに Cambridge University Press. 新刊というには、あまりに藪が立っようが、二十世紀末のインド近代美術研究の二大金字塔。インド地域研究者には通く知られているが、寡聞にして本邦美術畑の言及はあまりに少ない。旧植民地宗主国の権威ある大学出版会から刊行された博士論文、

インド文化研究センター